

困難校における道徳教育の意義

— 子ども達の希望を支える道徳教育 —

菅 原 亮 太

1 はじめに

「菅原出てこいやー!!」

私の教師生活は、この言葉から始まった。授業中に携帯電話で通話をしていた生徒を指導した後の事だった。携帯電話を取り上げたのは、3年生の男子で、学校のボス的な生徒であった。その仲間達が私の指導に対して腹を立て、職員室に怒鳴り込んできたのだ。私は校長室の奥にかくまわれ、他の先生方に興奮した生徒達をなだめていただいたおかげで、その場は事なきを得たが、衝撃的な教師デビューであった。

M中学校で教員としての一步を踏み出した私は、1年目から1年生の担任を任されることとなった。「初めてのことで右も左も分からない自分に、担任を務まるのだろうか」という大きな不安があったが、「目の前の子ども達と真っ直ぐに向き合って、自分にできることを精一杯やろう」という決意を持って迎えた4月だった。私のクラスは、私が1年目ということもあり、突出した問題児が比較的少ないクラスだった。その中に、先ほど紹介した学校のボスの弟Kがいた。Kは、小学校からの申し送りでも様々な問題があり、喫煙や万引きの経験もある生徒だった。ましてや、兄は学校のボスで、3年間問題行動を繰り返してきた生徒である。そんな問題を抱えたKを担任するとなった私は、「何としてもKを立ち直らせたい」と心に決め教師生活をスタートさせた。

しかし、その願いは早くも崩れ去ることとなる。1学期は無事に乗り越えたKだったが、夏休みで生活のリズムが崩れ、2学期以降休みがちとなり、3学期にはほぼ全欠の状態となってしまった。「やはり、この子も兄のように学校生活を送ることができないのか」と自分の無力さを感じていた。Kが結局、1年生の修了式も欠席し、Kに対して何もできないまま最初の1年を終えた。

そして迎えた2年目の4月。私は持ち上がりで2年生の担任となり、Kを引き続き見ていくこととなった。2年生の始業式には顔を出したKだったが、新しいクラスの名簿を見ると、新しいクラスが気に入らなかったらしく、名簿をビリビリに破り、帰ってしまった。このとき、「どうすればKの心に寄り添うことができるのか?」と、Kの背中を見ながら自問自答したことは今でも鮮明に覚

えている。

Kはその生い立ちから、多くの問題行動を起こしていたが、実は心優しい面もたくさん持っている生徒である。一度興奮すると物に当たったり、壁や戸を殴ったりする暴力的な面もあったが、教師や友達に手を挙げたことは3年間で、ただの一度もなかった。それはおそらく、家庭で父や兄に手を挙げられて育ち、人の痛みを感じられる心がKにはあったからだろう。また、学校行事やクラスでの取組にはとても協力的で、自分から場の雰囲気や和ませたり、一生懸命練習に取り組む姿も見られた。そして何よりKは、人の心が分かる生徒だった。落ち着いて話をすれば、こちらの言っていることを理解し、こちらの思いを感じ取ることができる。だからこそ私はKに対して最後まで関わりきることができたのだと思う。Kは2年生になると、ますます学校から足が遠ざかったが、登校した時には私と、最近の様子などを穏やかに話した。

3年生になり、いよいよ進路を選択する時期となった時、Kは三者面談で「ホンマは高校に行きたい」と本音を漏らした。2学期の半分が終わり、遅刻や欠席も多く、授業に出ていないため成績はオール1という状態だったが、私はKの意志と、わずかな希望に望みを託すことにした。それからのKは、ほとんど休むことがなくなり、授業でもノートを取り、積極的に挙手や発言をするようになった。もともとは平均以上の理解力があったKは、少しずつではあるが着実に、3年間の遅れを取り戻していった。そして、見事に公立高校に合格を果たしたのである。合格発表の日、満面の笑みで報告に来てくれたKの顔は本当に嬉しそうだった。

そんなKが学校の授業の中でもっとも輝き、存在感を放っていたのが「道徳」の時間である。学校を休みがちだったKだが、なぜか道徳の授業がある日だけは、出席することが多かった。そして毎時間のように、こちらがハッとするような発言をするのである。クラス全体もKがいる時の道徳は、自然と深まっていくような雰囲気があった。そして迎えた中学最後の道徳の時間、私は「東日本大震災で卒業式を上げられなかった生徒達」を題材に道徳の授業を行った。私が実際に撮影した現地の写真や、当時の新聞記事、震災を目の当たりにした現地の方々の話を50分の授業で生徒に伝え、「今こうして自分

達が卒業に向かって歩めていることへの感謝の気持ちを大切にしてほしい」という願いを込めての授業だった。この授業の感想でKは、次のように書いている。

「今日の道徳は、色々考えさせられた。今日の道徳をやるまでは、かわいそうとは思うものの、別に大した事はなかった。でも、今日の道徳をやって、理解できたし、感情が芽生えた。この授業は、オレらだけじゃなくて、大人も、世界の人にも、色んな人に見てもらいたい。」

このKの感想を読んでいるうちに、私の目からは涙が溢れていた。と同時に、心の奥から何とも言えない嬉しさが込み上げてきた。それは、Kが人として大切な心を失わずに、立派に成長してくれたことへの嬉しさだった。そして、そのKの希望となり、心と成長を支えていた一つの要因に、紛れもなく「道徳の時間」があったのだと、この時実感した。

それ以来私は、道徳が子ども達の希望と成長を支えるものだと信じ、教育活動に取り組んでいる。

ここでは、本校の道徳教育の取組によって、子ども、教師、学校がどのように変化していったのかを紹介し、「困難校における道徳教育の意味」と「道徳教育と子ども達の希望の関係性」について考えていきたい。

2 M中学校のこれまでと現在

(1)「困難校」とされる理由

M中学校は、京都府にある公立中学校である。校区には大規模商業店舗や商店街、工場、住宅地などが混在しており、府内では最大規模の府営団地を抱えている。古くは、農業地域として栄え、1970年代からベッドタウンとして急速に住宅化が進み、人口が急増した。それに伴い学校規模も拡大し、一時は1000人を越える生徒が在籍していた。しかし、近年は少子化により生徒数は年々減少し、現在は全校生徒246名（9学級）の小規模校である。

家庭環境については、一人親家庭の率が全校生徒の約30%、要・準要保護家庭が全体の50%を越え、子どもが放任状態になりがちな家庭や、多忙のため、学校の教育活動に協力を得にくい家庭が多い。そのため、基本的な生活習慣や、一般的な社会常識が身につけていない生徒が多く、基礎学力が定着しにくいことが大きな課題である。また、家庭での愛情不足のため、自尊感情が低く、自分の内面を上手に表現することが難しく、暴力的な言動が目立ち、生徒指導上の課題も大きい。この自尊感情の低さや問題行動の原因は、発達障害の二次的な障害のケースが多い。現在、本校の特別支援学級に所属する生徒は7名であるが、通常の学級に在籍する特別支援教育対象生徒は30名を超え、実際に取り出しの授業や、通級指導を受けている生徒が10名おり、通常の一斉指導の中

では、教育活動が困難な場面も少なくない。また、不登校生徒数も全体の8%と、小規模校にしてはかなりの割合である。さらに、帰国外国人生徒が全校生徒の11%在籍しており、生活習慣や文化の違い、言葉やコミュニケーションの課題が大きくあり、生徒と保護者と学校の連携も大きな課題となっている。

こういった背景から、子ども達が本来家庭でなされるべき教育やしつけが不十分なまま入学し、中学校の学習内容や指導を受け入れられない場合が多い。特に学力と生徒指導の問題はかなり深刻で、物事の理屈や社会一般の常識が通じない事が多々ある。さらに、地域的な背景から「他人の気持ちよりも、自分の利益を優先する」といった考えを持つ家庭も少なくなく、子ども達の中にも、そういった考えを持つ生徒がいるのも事実である。そのため、「心の教育」よりも「生活的な指導」が優先されるのが本校のこれまでの状態だった。

(2) 困難校における道徳教育の実状

私が教師としてM中学校に赴任した当時は、先ほど紹介したKの兄たちを中心に、学校が荒れていた時代だった。授業中の携帯電話の使用や校内での喫煙、対教師暴力など、様々な問題が毎日のように起こり、教師は日々その対応に追われていた。そんな中、道徳の時間は、年間35時間を一応は確保されていたものの、特活的な内容や、総合学習的な内容の授業が多く、子ども達の道徳性を養うことを目的とした授業ではなかった。というのも、担任の教師が教材研究をする時間がないという理由から、道徳の授業を消化するためにそういった内容になっていたのである。こうした状況を改善すべく、教務主任、道徳主任を中心に学校体制で道徳の時間を充実させていく試みが始まった。「生徒指導だけでも手一杯なのに、道徳のことなんて考えてられない」という反対意見もあったが、「子ども達の豊かな心を育むために」と、全校で道徳がスタートした。次の章では、M中学校の道徳教育の取組について、具体的に紹介していく。

3 M中学校の道徳教育の取組

(1)「知る・考える・表現する」を目標とした道徳教育

前にも述べたように本校では、地域的、家庭的な問題から、家庭における家族間のコミュニケーションを通して培われる豊かな心情や判断力が、十分に育っていない生徒が多い。かつ、自分自身や自分を取り巻く環境を客観視したり、将来への見通しを持ったりすることが苦手な生徒も多い。社会的な知識も不十分であり、「こんなことも知らないのか」ということも少なくない。そこで、本校では「道徳教育の目標」を、以下の3つに定めた。

- ① 育ちの中で不足しがちだった知識や経験を補い、そのことについての理解を深める時間。(知る)
- ② 人の心や生き方、社会や世界で起こっている事柄について主体的に深く考える時間。(考える)
- ③ 互いに意見を述べ合い、共感し、自分と他人との考え方の違いを知り、道徳的価値及び、それに基づいた人間としての生き方についての自覚を深める時間。(表現する)

このように本校では、上記の3つの目標を立て、道徳の時間を実施し、充実を図ることとした。

(2)「全校体制」の道徳の時間

以上の目標を掲げて始まった道徳の時間の改革だが、従来通りの「担任任せ」の道徳では、何も変わらないということから、「管理職も含めた、全校体制の道徳の時間」として、道徳の時間を行うことになった。具体的には、以下の4つの取組内容である。

- ① 年間35時間を全教師で分担
「道徳の時間」(年間35時間)を、副担任や管理職も含めた、全教師で分担し、各担当教師がクラスの現状を考慮し、特色ある道徳の授業を展開する。(担任が自分のオリジナルの道徳をするのは、年間で半分ほど)
- ② 担任と担当教師のチームティーチング体制
担当の教師に授業を任せきりにするのではなく、担任と担当教師が事前の準備から協力して行い、クラスの状況や資料についての交流・協議をする。授業では、担任と担当教師がチームティーチングを積極的に行い、よりスムーズで効果的な授業を展開する。(例：板書を担任が行い、授業担当者は授業の展開や生徒との対話に専念するなど) また、授業後には授業の反省や生徒の感想の交流を行い、教師間で授業を評価・分析をする。
- ③ 時間割の工夫
担当教師が全クラスで担任とのチームティーチングができるように、また、相互に道徳の時間の授業を参観して研修を深めることができるように、全クラスの道徳の時間を週程表上異なる時間に設定する。
- ④ 「道徳教室」の設置
道徳の時間をより充実した環境で行うため、余計な物は極力排除したシンプルな教室を設置。教室には黒板ではなくホワイトボードを設置し、壁もきれいな白に塗り直すなど、気持ちも爽やかで前向きに物事を考え、自分の意見を発表できる環境とした。副読本、「私たちの道徳」、「京の子ども 明日へのとびら」、人権教育資料、道徳学習ファイルを一括管理し、プロジェクター、テレビ、DVD、CD プレーヤーを常設して、読み物資料を中心に、必要に応じてその他の視聴覚資料

料などを用いた授業がいつでも行える環境になっている。

こうした、4つの取組を基本として、道徳の時間をより充実したものとするための改革を行った。

4 成果と課題

(1) 子ども達の変化

道徳教育の成果を他の教科と同じように、数字で評価することは大変難しいが、平成22年度から始まった本校の道徳教育の取組によって、前向きな成果が表れているのは間違いない。それは子ども達の変化や教師の変化、そして、学校自体の変化として表れている。その変化を、取組が始まった平成22年度に入学した1年生の3年間での変化と、冒頭でも紹介したKの変化を中心に紹介していきたい。

道徳が全校体制になって最初に変ったのは、子ども達である。全校で道徳の取組を始めてから3ヶ月程たった頃から、子ども達から「今日の道徳は誰なん？」という声が多く聞かれるようになった。また、「〇〇先生の道徳は、自由に発言できるからいいよな」とか、「△△先生の道徳は、何だか考えさせられるわ」といった、道徳の時間を話題にして子ども達が会話している姿を度々見かけるようになった。中には、「今日の道徳はイマイチだったなあ」とこちらを厳しく評価する生徒もいた。授業中の変化が見えてきたのもこの頃からで、道徳の授業中に寝る生徒が徐々に減っていったのである。特に挙手をして発言をするわけではないが、こちらの話を聴こうとか、発問について考えてみようという雰囲気が出ていた。さらに、最も大きく変化が出ていたのは、「授業後の感想」である。今までは、2～3行程度しか書いていなかった生徒がほとんどだったのが、少しずつ書く量が増え、1年目が終わる頃にはほぼ全員が感想用紙の半分以上に、自分の意見や感想を書くようになっていた。その中には、「今日、道徳でやったことは、今まで知らなかったことなので勉強になった」といった感想や、その授業の核心に迫る意見、独特のおもしろい考えを述べたもの、さらには「授業中に言えなかったので」と、授業中に言えなかった自分の意見をしっかりと書いている生徒がたくさんいた。こうして全校道徳の取組の1年目が終わる頃、「生徒が自分から授業に参加し、考える」という大きな変化が生まれていた。しかし、授業中の積極的な発言や、互いの意見を聴き合い、自分の考えが深まっていくということはありませんでした。

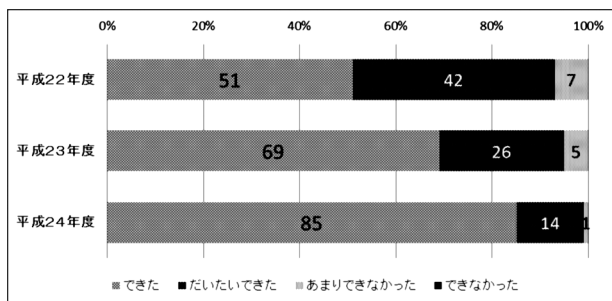
全校体制の道徳が2年目に入り、教師も生徒もこの体制に慣れ、少しずつ「道徳の時間」に柔らかさが出てきたように感じた。それと同時に、道徳の授業の雰囲気が前向きで温かな感じになる授業が増えていった。不思議

なことにそういった「柔らかい授業」では、子ども達の発言も自然と増えていくのであった。(この「柔らかい授業」については、後の章で考えたいと思う。)さらに、感想の中でも、今日の資料と自分自身のことを重ね合わせて感想や意見を書く生徒が増え、子ども達の中で、その時間の内容が深まっていくのが見て取れた。

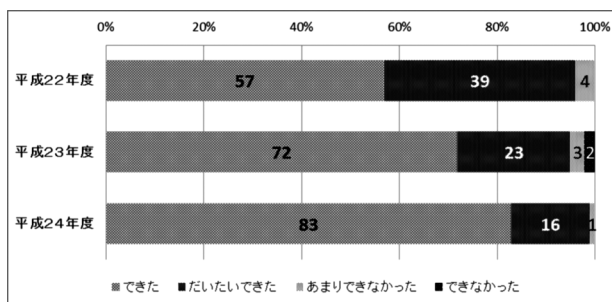
いよいよ全校体制の道徳も3年目に入り、子ども達も最上学年となった年は、授業の中でこちらが考えさせられる場面が多かった。授業中の挙手も、1年生の頃と比べ倍以上になり、子ども達が互いの意見を聞いて深まっている様子も度々見られるようになった。

このことは、毎年、年度末に全学年を対象に実施している“道徳アンケート”にも数字として表れている。このアンケートでは、1年間で、どの資料が「考えさせられたか」、「印象に残ったか」を選ばせ、「道徳の時間」についての感想も書かせている。その中で、自分を振り返る質問として、「色々なことを知ることができたか」、「色々なことを考えることができたか」、「自分の考えや意見を表現することができたか」の質問をしている。これは、本校の道徳教育の目標である、「知る・考える・表現する」が、どれほど達成できているかを評価するための質問である。この質問に対する先ほどの学年の解答と、3年間での変化は以下の通りである。

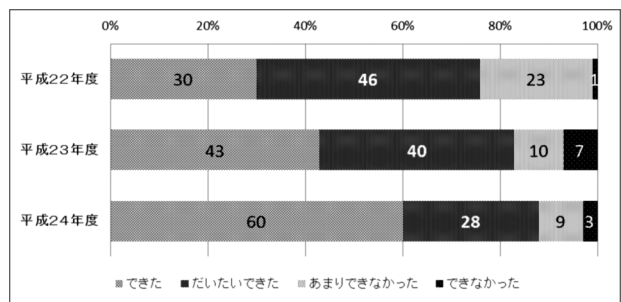
Q. 道徳の時間に、色々なことを知ることができたか？



Q. 道徳の時間に、色々なことを考えることができたか？



Q. 道徳の時間に、自分の考えや意見を表現することができたか？



このように、道徳の時間だけ見ても、3年間で子ども達は大きく変化し、物事を知り、自分のこととして考え、自分の考えや意見を表現できるようになった。これは、教師達の実感としても同じことが言える。実際に教師が普段接している中でも、子ども達の雰囲気の前向きになっていった。人の気持ちを考えて行動する子どもが増えていったのも事実である。そして何より、素直に人の話を聴き、素直に過ちを認め、素直に涙を流し、素直に自分の気持ちを言えるようになっていったことが大きな変化である。これはまぎれもなく、子ども達の心が豊かになり、自分を客観的にふり返り、自分の過ちに気づき、自分の心で物事を判断することができるようになったということである。つまり、道徳教育の中で、道徳性（道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度）が養われ、心（内面）が豊かになったからに他ならない。

私の大学院時代の恩師である横山利弘先生は、各地での講演会や研修会で、「心は見えますか、見えませんか？」という質問をされる。聞かれた人の数人が「見える」と答え、半分ほどの人が「見えない」と答え、3分の1ほどの人が「見えたり、見えなかったりする」と答える。横山先生は、「心は全身のあらゆるところから見える。それは、ちょっとしたしぐさだったり、何気ない言葉だったり。また、表情や態度、声にも心が表れる。ただ、それを隠すこともできる。」と答えられる。つまり、子ども達の言葉や行動は、心の表れなのである。道徳教育によって子ども達が、素直に自分の心を出すことができるようになったら、また、その出したものが今までよりも善いものだったら、道徳教育によって子ども達の心がよりよいものへと変化したと考えられる。

この心の成長が最も顕著に表れていたのが、最初に紹介したKである。Kもこの全校道徳の取組が始まって以降、大きく変化していった生徒の一人である。先にも述べたように、道徳の時間がある日は、学校に登校することが多くなり、発言の回数も次第に増えていったKであるが、目を見張るのはその発言の深さである。最初は「この〇〇っていう人物腹立つなあ。」とか、「こんなありえへんやん。普通に考えて分かるやろ。」といった

資料を読んだ感想を言うことが多かった。しかし、月日が経つにつれて、段々と資料の読みが深くなり、こちらの発問に対しても「オレもこんなしたことあるけど、気持ち分かるわぁ。」「オレがこいつ（主人公）やったらこうするな。」といった発言に変わり、自分自身を主人公と置き換えて物事を考えられるようになっていった。Kの道徳的な変化とともに、Kの表情も次第に柔らかくなり、自然と問題行動が減り、落ち着いた学校生活が送れるようになっていった。ただこれは、Kだけに限ったことではなく、学校全体として、全校道徳が始まって以降、問題事象の件数は減少していったのである。このように道徳には、子ども達の心を育み、豊かにし、内面から変えていく力がある。

（２）教師の変化

道徳が全校体制になって変わったのは、子ども達だけではない。教師もこの中で大きく変化していった。前にも述べたように、この全校道徳の取組がスタートするに当たって、反対する教師も少なくなかった。その理由は「余計な仕事が増える」、「生徒指導をやっておけばいい」、「道徳なんてしばらくやってないから自信がない」といったものだった。そのため、全校道徳１年目は、「全教師で、全学年年間35時間をやり切ることを目標として取組をはじめた。各学年、道徳担当の先生方の頑張りの甲斐あって、なんとか年間35時間を「道徳」として実施でき、１年目の試みは無事に終えることができた。しかし、授業の内容的にはまだまだ満足のいくものではなかったが、少しずつ子ども達や学校が変わりはじめていったことを、教師達も感じ始めていた。教師の中には「準備は大変だったけど、やってみたら案外楽しかった」と言う人まで出てきた。

２年目を迎える時、反対意見を言う先生はほとんどいなくなっていた。それはおそらく、子ども達が変化していったことが大きな要因であろう。教師には「子どものためになる」と分かったことは、やらずにはいられない性の人が多い。道徳をしていく中で、少しずつ子ども達の様子や雰囲気が変わってきたことに、反対していた先生達も気づいたのだろう。この頃から、職員室でも「こんな内容がしたいんだけど、何かいい資料ないかな?」「授業でどんな発問の仕方をしたらいい?」と、道徳の授業について話をする機会が増えていった。それに伴い、お互いの授業を参観し合うことが増えていった。少しずつ「道徳の授業」に対して前向きな雰囲気が生まれていった２年目であった。

３年目を迎える頃には、全校道徳が当たり前になっており、教師の中には「今年はどんな内容でやろうか」「新しいことにもチャレンジしてみようかな」といった、前向きな意識で取り組む教師が増えていった。そのせいも

あり、３年目の全校道徳は、各先生の特徴が出た面白い授業がたくさんあった。アニメの「ドラえもん」を題材に道徳をする先生や、マンガの主人公の生き方を題材にした先生、さらには、その年に行われたロンドンオリンピックをタイムリーな時期に扱った先生もいた。子ども達も今までにない道徳の時間に、興味を持ち、楽しみにする生徒が増えていった。それによって教師もモチベーションが上がり、「子ども達の期待を裏切らないように」という意識で授業の準備をするなど、先生方の意識の変化も大きなものがあった。

このように、道徳の取組を本格的に行い、教師も子どもと一緒に変わっていったのである。実はこの教師の変化には、さらに大きな副産物があった。それは、「生徒指導」の変化である。これまでの生徒指導では、生徒の表面的な言動を指導し、その場を治めることでよしとすることが多かった。私がM中学校に赴任した当時も、しつけのような生徒指導を多くしたことを覚えている。しかし、全校体制で道徳をやり始めてから段々と、そういった表面だけの指導から、「内面にも目を向けた指導」へと教師の指導方法も変わっていったのである。具体的には指導の場面で、「本当にそれでよいのか?」という問いかけをし、子ども達自身に考えさせ、内面に訴えかける指導をするようになった。それによって、子ども達が自分の過ちについて自覚し、同じ失敗を繰り返すことが減り、自分達で考えて行動することが増えていった。これが学校の問題事象が減少した大きな要因だと考えられる。

その後も全校体制の道徳は続き、学校は徐々に落ち着きを取り戻し、生徒達の表情も豊かになっている。これが全て、道徳教育のおかげだというわけではないが、道徳的なエッセンスが学校の教育活動全体に入ったことで、子ども、教師、学校が変化したことは間違いない。全校道徳の取組を行って、「道徳教育と生徒指導が学校を支える両輪である。」という言葉を実感した先生も少なくないはずである。

（３）これからの課題

「道徳を年間35時間、道徳の授業としてしっかりと行う。」という目標で始まった全校道徳の取組も、今年（平成26年度）で５年目を迎えた。この５年で、学校の状況も少しずつ落ち着き、学校全体で新しい取組や、５年前にはできなかった活動を行えるようになった。肝心の道徳の時間も「全校道徳」が定着し、M中学校独自のスタイルとして、他の学校からも参観に来られる先生も出てきた。そんな中で見えてきた、「これから先、全校道徳をより効果的なものへとするための課題」をいくつか挙げていきたい。

① ティームティーチングによる指導を、より機能的か

つ効果的に行う。

- ② 視聴覚資料に頼るのではなく、「読み物資料」を使った授業を充実させる。
- ③ ○○教育の中に、道徳的な要素を盛り込み、より生き方について考えられる学習にする。
- ④ 教師間の道徳教育に対する温度差や、道徳の授業レベルの差を改善していく。
- ⑤ 「道徳通信」等で、生徒の感想や授業の様子を共有し、事後指導の充実と、家庭との連携を強化していく。

現段階では、こうした課題があり、今後の改善が必要となっている。特に②と④については、教師の道徳に対する意識の問題が大きいと考える。道徳の授業に自信がない教師ほど、視聴覚資料を使ったり、道徳の授業を敬遠する傾向にある。この意識を改善することは非常に難しいことではあるが、生徒が変わったことを実感できた時に道徳教育の必要性に気づいてもらえると信じている。そこが始まりとなり、その後の授業改善や、自己研鑽に繋がるのである。実際に、この5年間で道徳に対する考え方や、授業のレベルが飛躍的に上がった先生方もたくさんいる。「全ては、子ども達がよりよく生きるために」この道徳教育の目標を達成するためにも、教師全員が道徳教育について、もっと積極的に研鑽を積み必要があるのである。

5 困難校における道徳教育の意義

(1) 困難校だからこそ必要な道徳教育

さて、これまで述べたように、学校教育にとって道徳教育は、決して欠かすことのできないものである。たとえば学校が荒れていて、「困難校」と呼ばれていてもである。むしろ、困難校であるからこそ、道徳教育は必要であり、意味を持つのである。本校での道徳の取組が生徒を、教師を、学校を変えたように、現状を変えるための努力やアイデア、そして情熱があれば、必ず子ども達は応えてくれるはずである。困難校と呼ばれる学校で、道徳をすることの意味というのは、他の落ち着いた学校に比べて違うものがある。それは前にも述べた、「柔らかな授業」がヒントとなっている。困難校と呼ばれる学校、特に本校の場合には、親からの愛情をしっかりと受けて育っている生徒が少ない。そのため、人（特に教師など、自分の身近にいる大人）との関わりを必要以上に求めてくる生徒が多い。そうした子ども達が、人との関わりを求める場が学校である。学校では、自分の話を親身になって聞いてくれる教師の下へと子ども達は集まる。授業においても、自分が発表できる授業は、寝ずに起きて話を聴いている。しかし、教科の授業なのかでは、個人によって学力差があり、学力の低い子は次

第にフェードアウトしてしまう。そんな子ども達が、学力に関係なく、自分の考えを自由に発表できる場が、「道徳の時間」なのである。道徳の時間には、決まった答えはない。自分が生き方について考えたことが、その子の答えなのである。教師がしっかりとその答えを受け止め、周りの子ども達もその意見を聴き合える雰囲気があれば、自然と授業は深まっていくのである。この雰囲気こそが「柔らかな授業」の正体であり、子ども達が学校の中で育っていく土壌なのである。この雰囲気をつくり出すためには、道徳の時間だけでは無理である。普段の学級経営や、教師と子ども達との関係、さらには学年や学校全体の雰囲気が重要となる。つまり、学習指導要領にもあるように、教育活動全体で子ども達の心に目を向けた教育をしていかなければならないのである。このことを実感するまでに私は教師になってから3年近くかかった。Kが卒業式で私に書いてくれた手紙や、Kの3年間での成長を考えると、このことは間違っていないのだと確信できる。

道徳の時間は、あくまでも「きっかけと要の時間」でしかない。しかし困難校においては、自分の意見を聴いてもらえる、認めてもらえるという道徳の時間が、この上ない意味を持ってくる。そして、最も大切なことは、道徳的な観点を常に持ち、子ども達と接していくことなのである。

(2) 子ども達の希望を支える道徳教育

以上のように道徳教育は、困難校において大変意味のあるものだということが分かった。そしてもう一つ、私が教師になって感じている大きなことがある。それは、「道徳教育が子ども達の希望を支えている」ということである。私は、以前書いた修士論文の中で、「希望は教育を根底から支えるものである」という結論に至った。しかし、この論文の中で、希望がどこから生み出されるのかについては、結論が出ないままだった。しかし、教師として子ども達と過ごす中で、その答えに近づくことがいくつかあった。そのうちの一つが「道徳教育」である。本校の道徳の取組の中で、子ども達が変化したことは先にも述べた通りであるが、その変化の中で最も象徴的に、大きく変わったのが、子ども達の「前向きさと素直さ」である。この前向きさと素直さは、希望から生み出される気分として最も分かりやすいものである。それが、道徳教育によって、子ども達の中から出たとするならば、「道徳教育によって、子ども達の希望は支えられている」と考えられる。つまり、教育を根底から支える希望を支えている道徳教育は、学校教育にとって欠くことのできない、大変重要な、意味のあるものだと考えられる。現に、本校以外にも、道徳教育に力を入れてから、子どもや学校が変わったということが数多く見られ

る。(本校の隣町に隣接するK中学校もそのうちの一つである) このことについて現段階ではまだ感覚的なものであり、十分な考察することはできないが、これからの教育活動を通じて、より具体的に考察していきたいと思う。

6 終わりに

こうして、教育現場で子ども達と接していると、大学院時代には想像もしなかったことや、想像を遥かに超えることがたくさんあることに気づかされた。私はM中学校に赴任して6年目になるが、毎年、新たな気づきがあり、周りの先生方や、子ども達から教えられることがたくさんある。その中でも、先に挙げたKは私にとって特別な存在であった。Kには、教師の大変さ、無力さ、やりがい、そして、子ども一人一人の人生に大きく関わる存在であるということを教えられた。中学校を卒業した後のKは、3ヶ月で高校を中退し、現在は知り合いの土木関係の会社で働いている。今も年に数回は学校に来て顔を見せ、世間話をして帰って行く。私にとってその時間は、昔を思い出すと同時に、社会に出て成長したKの姿を確認できるとても大切な時間である。そして、毎回Kは帰り際に「弟のことを頼むな」と言って帰って行くのである。実は、今年度から1年生の担任となった私は、Kの弟を担当することとなったのである。兄と同じくやんちゃで、気持ちの切れやすい弟であるが、入学前の心配をよそに、今も休むことなく学校に通い、しっかりと授業を受けている。成績も平均以上あり、サッカーの大好きな気持ちの良い生徒である。そして、Kと同じように人の気持ちを考えることができる優しい子でもある。もちろん道徳の時間では、毎回のようこちらがハッとするような発言をしてくれる。

このように、一人一人の生徒の存在があって、教師は教師として生きていけるのだと思う。そこで互いの心に目を向けながら関係をつくり、お互いがお互いの希望として生きていけるのである。私はこれからも、子ども達の希望として、子ども達とともに、教師の道を真っ直ぐ歩んでいく所存である。

最後に、まだまだ未熟な私を日々サポートしていただき、ともに子ども達と向き合っているM中学校の先生方、私を常に叱咤激励してくださる横山利弘先生に深く感謝致します。

そして、このレポートを目にされた先生方が、大変な状況の中でも希望を失わず、道徳教育を行い、子ども達とともによい時間を過ごしていただけたらと切に願います。

【参考文献】

横山利弘『道徳教育とは何だろうか』(暁教育図書)
横山利弘『道徳教育、画餅からの脱却』(暁教育図書)
O.F. ボルノウ『教育を支えるもの』(黎明書房)

(すがわら りょうた・宇治市立南宇治中学校教諭)